

渡谷利香作 「自殺」

- ナレーション 渡谷利香さんが通っていた中学校は、私立^{わたくし}でしたので、よほどのひどい成績とか問題を起こさなければ、短大までエスカレーター式に行けることになっていました。しかし私立^{わたくし}特有の厳しい校則、やりたいことも頭から押さえつけてしまう保守的な校風は、彼女に次第にあきらめと無気力感を与えていきました。
- 渡谷利香 あー、本当に退屈ねえ。規則だらけであれもダメ、これもダメ。うるさいったらありやしない。もうやんなっちゃうよ。
- A子 もういい加減、何もする気はなくなるわよ。
- B夫 1年生のころは無我夢中で必死だったけど、2年も2学期となるとなあ。けどこの状態が、中学があと1年半、高校3年、合わせて4年半も続くんだぜ。
- 利香 おえっ。と言っても、ほかの高校受ける気もしないもんねえ。結局、ぬるま湯は出難いのよ。出れば風邪ひくしね。
- ナレーション こんなことを、時々、いえ、年中ボヤきながらも、日々は過ぎていきました。でも、人の趣味うんぬんにまで口を出す学校の校風の中で、彼女の無気力感は顕著になり、学校に対する不満、反感などで、神経だけはとんがっていきました。
- 効果音 (クラスのガヤ)
- 利香(モノローグ) こんな授業、聞いたって聞かなくなつたって高校入れちゃうんだから、天国なのかしらねえ、ここは。その代償が“校則”か。(笑う)まじめに聞く気にもならないよ。おー、今日も天気がいいこと。
- B夫 (ささやき)よお、利香。外ばかり見ていて、試験近いのに大丈夫かよ？
- 利香 さあ…。
- B夫 お前、最近、寝てるか外見てるかだな。先公気がついてるぜ。ヤバい点取ると親子面談だぞ。
- 利香 あんたねえ、気が沈んでるときに、ますます沈むようなこと言わないでよ。
- B夫 俺は心配だから言ってるんだろ。
- 利香 おーありがたすぎて涙が出そう。おせっかい！ そんなこと重々承知よ。
- B夫 何だ、その言い方。
- ナレーション ——とまあ、万事こう言った調子なのです。家に帰り、一人考えると、あまりにも反省することが多すぎて——。
- 利香(モノローグ) (ため息)自分の気持ちがすっきりしない。はっきりしない。だから何もする気がなくて…。分かってるのよ、こんな態度がよくないってことぐらい。分かっているから、どうにかしようとは思うけど、どうすればいいのか分からない。結局、こんな自分にいらだちを感じて、他人に当たったりしている。悪循環なのよね。あーやだ。こんなことばかり考えてると、気分がもつと沈んじゃう。
- ナレーション そう思っても、何か善処する方法を考えるでもなく、日々を過ごすうちに、彼女のうつ病的精神状態は、ますますひどくなっていきました。そんな状態で独り考えることは、暗いことばかりになってしまいました。
- 利香(モノローグ) 毎日同じことの繰り返しで、退屈。…とこぼしても今に始まったことじゃないし、もうどうにか

しようとも思わない。みんな、何が面白くて生きているんだろう。こんな風な私の生き方…。そうなんだ、こんな無気力で怠惰な毎日が、高校卒業までだから、4年。ううん、待遇は変わっても、結局私の精神状態がこのままなら、内容的には同じ毎日が、死ぬまで続くんじやないかしら。それだったら、生きてく必要なんてないじゃない。早く死んじゃったほうがずっといいじゃない。そうよ、死んじゃえば、こんなことで悩むこともなくなるのに。(寂しい笑い)でもそんなこと頭で思っても、結局実行できないよねえ。第一、私クリスチャンなのに。

ナレーション　　そうです。彼女は中1の時にバプテスマ(洗礼)を受けていたのです。しかし、その当時、希望でいっぱいだった彼女も、今では、無気力感が彼女の神様に対する態度にまで影響していました。こんな風なので、学校においても、先生方によく思われるはずはありません。

そんなある日、彼女は、ロックのコンサートに行きました。そしてその時、学校の補導の先生に見つかってしまったのです。次の日、彼女のお父さんが呼び出されました。

先生　　学校の規則では、ああいうのを聞きに行くのは、禁止していること、お父さんもご存じでしょう。

父　　はあ。

先生　　それを、困りますね。お宅のしつけは、どうなっているんですかね。それに、あんな派手な服装をさせて。今までだって、髪形を崩したり、教師をバカにしたり、授業は真面目に聞かないし、ほんとに困りますね。

父　　はあ。どうもすみません。

ナレーション　　お父さんは家に帰るなり――。

父　　利香！ 利香、ちょっと来なさい。

利香　　なあに？

父　　今日、先生に呼び出されて、学校へ行ってきたよ。昨日だけでなく、普段でもお前の態度がよくないって話、たっぷり聞かされたよ。親の目をごまかして、あんなところ行って、そのしりぬぐいを私にさせる。これが初めてじゃないんだからな。お前みたいな子は、もういなくていい。何度注意されたって、直そうともしない。これ以上何かやったら、もう学校へ行くのやめなさい。

ナレーション　　彼女は、何も言えませんでした。全く父親の言うとおりののですから。

利香(モノローグ)　　そうよ、私なんかいないほうがいいんだ。この先だって、いくら注意されても、私自身よくなるとは思えない。どうしたら、私のこの精神状態が良くなるかも分からない。大体、なんのために生きているのか、分からないんだもの。きっと両親にも迷惑をかけ続けるだろう。同じことを何度考えたって、らちは空かないわ。結局、私が死んじゃうのが理想的なのよ。やるなら今だわ。

ナレーション　　そうつぶやいて、彼女は机の中からカッターナイフを取り出し、首筋に当てて少し押してみました。

利香(モノローグ)　　痛い！ ダメ、死ぬなんて怖くてできない。(泣きじゃくりながら)結局、何もできない。生きたくもないのに、死ぬこともできない。どうすればいいんだろう。もう何も分からない…。ああ、神様、どうすればいいの？

ナレーション　　その後、彼女は、一切考えることをやめてしまったようでした。友人と適当に戯れて、へらへら笑って。それは、まるで生きたしかばねのようでした。しかし、イエス様は、あの時の彼女

の祈りを(と言っても、彼女にとっては、ただ思わず口から出た叫びにすぎなかったのですが)お聞き逃しにはならなかったのです。

ある日のこと、彼女は、ヒマつぶしに、なんの気なしに、一冊の本のページを読むともなくめくっていました。その本はキリスト教関係の本で、生きていく上の質問、疑問に答える形式になっていました。人生が、無味乾燥でむなしく、くだらないものに思えてしょうがないという人の疑問が、彼女の今の心とそっくりなので、気に入って読んでみました。

「つまり、あなたは、今まで、(男性著者の声にダブる)目標もない、味気もない、空虚な生活しか送ってこれなかったのでしょうか。でも人間は、本来、目的もなく生きるようにはつくられていないのです。それで、どうすればよいかといいますと、第一、神様に祈ってみてください。私は、こうしたことによって平安を得た人を、幾百となく知っています。」

ナレーション 彼女の心には、何か一筋の光が差し込んだような気がしました。

利香(モノローグ) そうなんだ。今の私の心は学校の規則と自分の不満に縛られちゃって、空虚になってしまっているんだ。自分勝手に、何もしないで、一人で“人生は下らない”と思っちゃってる。そうよ、それなら自分の目標を立てられるようなところへ、自分の環境を変えればいいんだ。このままじゃおかしくなっちゃうのは分かっているんだから。受験してみよう。とにかく頑張ってみよう。——そうなんだ、このことが神様のお導きなんだ。今まで、こんなこと考えもしなかったんだもの。

ナレーション そう気づいた時、彼女の口からは、長い間忘れていた、祈りの言葉が出てきました。

利香 (祈る)神様、感謝します。私に目標を与えてくださったことを。そして目標に立ち向かう勇気を与えてくださったことを。あなたは、本当に全能な方です。必要な時に、必要な助けを与えてくださいます。本当に、本当にありがとうございます。

<完>